

巻 頭 言

経営情報学部長 松 浦 博

情報(インフォメーション)という単語は適用範囲が広いと、あいまいに使われていることも多い。この単語が最初に使われたのはフランスの兵書の訳書の中で、「敵情の報知」の意味で使用されたとのことである。明治の文豪の造語という通説は事実ではなかった。軍事においては知られていないことに情報としての価値があり、また安易に信用してはならないとされた。英語ではインテリジェンスという単語が使われ、スパイを連想させる。

シャノンの提唱した情報理論では情報を科学的に扱うために、発生確率と関連付けて情報量を定義した。めったに起こらないことが起こると、情報量は大きいという一般的感觉とも合っている。定量化の難しい情報の意味や価値を対象とせず情報量を定義することによって、情報伝達の効率化などを通じて情報の実用化に貢献した。一方、養老孟先生は「バカの壁」で「万物流転、情報不変」と述べられた。この情報は記録された情報であり、データといっても良いであろう。また、情報化社会とは日々変化する生き物である自分自身を意識の中では「私は私」と言い続け、自身が情報化している社会と喝破した。

本学部が創立された26年前は「オフィス・オートメーション(OA)」が叫ばれた時代であり、オフィスの業務にオフィスコンピュータ、コピー機、FAX、ワープロなど情報機器を導入することが中心であった。その時代に、情報機器の利用方法ではなく「公共組織も含めた経営と情報との融合教育」を目指して本学部を創立したことは創始者の慧眼である。

情報機器・システムの進化とともに社会構造が情報社会、IT社会、そして知識社会へと推移してきた。情報社会とは情報が諸資源と同等の価値を有し、それらを中心として機能する社会のこととされる。経営の資源としても「人、物、金」に「情報」が加わった。IT社会とは情報通信技術としてインターネットが加わり、インターネットを通じて膨大な情報を受け取る社会のことである。ピーター・ドラッカーは「ポスト資本主義社会」(1993)において知識が資源の中核となる「知識社会」の到来を述べている。膨大に蓄積された情報(ビッグデータ)の意味や価値を分析し積極的に有用な知識を取り出して、企業経営・組織経営・地域経営をはじめとし、様々な分野に活用する時代に入ったといえるのではないか。現代のスパイもほとんどの情報を既知になっている情報(データ)を分析することによって獲得すると聞いたことがある。

最初のコンピュータは著名な数学者フォン・ノイマンがかかわったENIACであるとされてきた。しかし、実際はENIACではなかったことが特許裁判によって証明されたにもかかわらず、いまだにその認識は普及してはいない。また、ノイマン型といわれる方式も実はノイマンが考えたものではなかった。記録も不十分な時代ならいざ知らず、現代でもこのありさまである。マンハッタン計画を指揮していたヴァネヴァーブッシュは有益な情報を「情報洪水」の中で見逃してしまうのではないかと懸念し、論文「思うがままに(As We May Think)」(1945)の中でMEMEXというマイクロフィルムを読み取り装置のようなものをイメージし、知性の増幅機械の必要性を提唱した。この論文を見たコンピュータ界の巨人であるアランケイがあらゆるメディア(人間の技術よる製品)になりうるメタメディアとしてのコンピュータを提唱した。その実現のための前段としてAltoというコンピュータを開発し、様々な機器に代替する現代のパソコンの系統を開拓する先駆者となった。

あらゆるメディアは多くの科学者、技術者、企業家、ユーザーらが育て上げてきたものであり、スーパースターはいたとしても決して数人の力で成し遂げられたものではない。本誌「経営と情報」も社会、技術のイノベーションの一助となることを大いに期待する。